

『ソフト剣道』の構想と展開

教科・領域教育専攻

生活・健康系（保健体育）コース

村上 徳恭

指導教員 木原 資裕

I. 緒言

日本における武道は殺傷の術としての起源を持ちつつ、高い倫理性や思考性を持つ運動文化へと止揚してきた歴史を持っており、対人的運動形態を通して、自己の判断力を養い、相手を尊重する教育課題を担える教材としての資質を有している。特に剣道は、「剣道は剣の理法の修練による人間形成の道である」という理念の下、他の競技に比べ、生涯にわたり世代を超えて実践できる運動特性を持っている。しかし、近年では、剣道人口の減少化という事態が加速度的に進行している。

また、平成20年3月に新・学習指導要領の公示がなされ、その中で、平成23年春から中学校の体育授業で武道の男女必修化が示されたことにより、これまで学習指導要領に示されてきた「心と体を一体としてとらえる」心身一元論の考え方や、「我が国固有の文化」「伝統的な行動の仕方」「礼儀作法」等は、武道の領域で学習させることが期待されていると言えよう。ここには、単に体育科教育的な視点だけでなく、武道論的な立場から、授業（指導）内容を精選し、心と体を一体としてとらえ、技の完結性を目指す運動領域として「武道」を考える必要がある。

木原ら（2011）は武道必修化に向けて様々な取り組みが進む中で問題点として、初心者指導の難しさを挙げ、特に剣道は他の競技と比べ、

防具の扱いや竹刀打突での痛みなどは非日常的なものであり、馴染みがないため、限られた授業時間の中で生徒たちに、剣道の良さと運動欲求をともに充足させることは至難のことであるとしている。そこで、剣道の授業において、剣道の面と竹刀をスポーツチャンバラの面と剣に変更して行うことで、初心者の技能レベルの向上速度が剣道の用具のみを使用した場合と比べて速く、安全性を確保できるなど、その有効性を示唆している。

ただし、スポーツチャンバラの用具を使用しているため、剣道的な技の習得しようとした場合に、スポーツチャンバラの剣では支障をきたす場面が見られることから、竹刀に近い感覚であり、かつ安全性を確保できる用具の試行・選択が必須であると考えられる。

以上のことから本研究では、剣道論的立場とスポーツチャンバラ的立場を併せ持つ『ソフト剣道』の開発によって初心者指導方法を確立するとともに、その実践と普及について考察し、体育科教材としての可能性を検討し、剣道人口増加のきっかけにすることを目的とする。

II. 研究方法

- 1) 他の武道，スポーツにおける初心者指導の成功例を文献及びインターネットにより情報収集を行う。
- 2) スポーツチャンバラの面と剣ではなく、よ

り剣道的で操作性と安全性などに優れた用具を試行する。

- 3) 『ソフト剣道』における指導内容を精選し、最終的には剣道に繋がられるような指導方法を検討する。
- 4) 授業実践を行ない、『ソフト剣道』として確立させ、普及方法を探るとともに、体育科教材としての可能性を検討する。

Ⅲ. 結果と考察

1) 『ソフト剣道』の在り方

本研究における『ソフト剣道』の在り方としては、①剣道初心者の教師でも指導可能な内容である事、②生徒たちの運動欲求を満たせる運動量がある事、③剣道(武道)の持つ教育的意義を伝えられるものである事、④両極の考え方ではなくその中間的な存在(伝統と柔軟性のバランス)である事、⑤安心して安全な用具を使用する事、⑥最終的には本来の剣道を修行出来るような位置である事という指標を設けた。

2) 『ソフト剣道』の実践

『ソフト剣道』の実践では、用具は従来の剣道具の面と竹刀をスポチャン面とエアースフト剣及び袋竹刀(2種類)を使用し、柳生流袋竹刀を用いた「木刀による剣道基本技稽古法」を体得することを最終目的とした。また、習熟度に合わせて用具を変化させ、本来の剣道に繋がれるような内容で指導を行った。その際、剣道キーワードとして、①「凛々しく・格好良く」②「相手と呼吸を合わせよう」を活用した。また、受講生に袴を着用させることにより、剣道らしさの創出を図った。

3) 成果

『ソフト剣道』の実践の成果としては、最初の授業から相手を打つことができるので受講生

の意欲が高まりやすい、エアースフト剣を用いれば、竹刀を振るだけの筋力がない受講生(特に女子生徒)でも振れるため積極的に活動できる、受講生から「痛い」という発言がない、などが挙げられた。また、剣道の面を着けるようになってからは、袋竹刀を用いることで痛みに対応できる。

よって、『ソフト剣道』は剣道未経験の教師でも安全面に関して十分に配慮でき、指導内容の中核である「木刀による剣道基本技稽古法」はDVDや講習会等で体得できるため、実践可能な教材であると考えられる。

4) 『ソフト剣道』の普及は可能か

中学校だけでなく、小学校での実践を含めた展開ができれば『ソフト剣道』の普及はより現実的になると考えられる。小学校において運動プログラムの基礎ができれば、中学校における授業もスムーズに行えるのではないだろうか。しかし、今回行った実践は中学校向けのものであり、小学校での実践には不向きである。そのため、小学校向けの指導内容が確立すれば、普及も可能であると考えられる。

Ⅳ. 結語

今回実践した『ソフト剣道』は、問題点の多い中学校の剣道授業において、それらを解決し、十分剣道に繋がれる成果があった。今後は、用具の選択を含めて安全性への配慮について検討していくことが必要である。また、小学校から中学校への段階を踏まえた実践内容を精選し、確立することで体育科教材としての実践が行えるよう取り組んでいかなければならない。そして、剣道人口の増加を目標に、『ソフト剣道』の継続的な実践と検討を行い、普及の可能性を探っていくことが、今後の重要課題と言える。